

巻頭言

杏林大学保健学部 臨床検査技術学科
田口 晴彦

杏林医学会雑誌50巻が発行される2019年は改元が行われる。新天皇即位に伴う新元号が4月1日に閣議決定・公表され、改元の政令は新天皇が即位する5月1日に施行される。平成が終わるのである。

平成の時代、ベルリンの壁が無くなり、日本ではバブルの崩壊など政治・経済界に大きな変様があった。科学の進歩も同様で、これに最も貢献したものはコンピュータであると言える。今や学会発表はパーソナルコンピュータを用い、PowerPoint等のプレゼンテーションソフトで動画なども取り入れ、誰もが容易にわかりやすく発表することができるようになった。また、インターネットの発達も生活を大きく変えた。瞬時に世界の人々と情報交換することが可能となったからである。還暦を迎えた小生が研究に没頭した時代は、学会発表と言えばスライドを用いた。レタリングした原稿を大学の写真室（当時、写真室という部署があった）に作製依頼し、約1週間してようやくスライドを入手することができた。稀に誤字などがあると発表までに修正が間に合わない時代である。さらに、論文は医学図書館で文献検索し、その論文を取り寄せて引用した。多くの雑誌が電子ジャーナルとなった今からすると、笑い話のようだ。

さて、平成の先の時代はいかなる時代になるのだろうか。問題解決などの知的行動を人間に代わってコンピュータに行わせる、いわゆる人工知能（artificial intelligence: AI）が台頭する時代となるのだろうか。おそらく、AIの出現は私たちの生活に大きなインパクトを与えるに違いない。特に物事の動向予想などには大いに活用されるだろう。しかしながら、AIは時間を分解してつなぎ、物事の動きを予想する機械的見解を導き出す。したがって、人間を深く理解した人文知については理解できないと小生は想像している。物事を見つめて深く考え、判断することは人間にしかできないと思うのだ。2018年4月、米国の食品医薬品局は、網膜画像から自動で糖尿病網膜症を診断するAIを医療機器として初めて認可した。一方、厚生労働省は、今年に入りAIを使った診断・治療の支援技術について、「診療に関する最終的な判断の責任は医師が負う」との見解をまとめた。人間をこえるAIは、現在のところ認められないということだろう。

杏林医学会は、昭和、平成の時代を経て創立50年を迎える。会員の若い先生には、新しい技術を取り入れた、そして新たな知見を引用しながら構築された研究を、奮って杏林医学会雑誌に投稿していただきたいと願っている。いつの時代においても、研究に誠実に取り組む姿勢が杏林医学会の発展を支えて来たからだ。